歴史の発遣

寺川俊昭

一

最も具体的な宗教生活は、教法を所依とする生活である。このことは、教えを聞思する生活と言い換えてもよいであろうが、端的にいって、教法を所依とするところに、「人心の至奥より生ずる至盛の要求」の満足されたすがたがある。もとより我々が生活の所依として教法をもつことは、一つの道程の帰結であるというべきであるかも知れないが、そのもとには、人生そのものが、我々を教えの前に立たしめずにはおかないものを、孕んでいるといわなければならない。いわば人生の中には、教えを聞かなくては、「生きても居られず、死んで往くことも出来ぬ」というような状況が必ずあるのであって、そのような状況の中で、魂の至盛の要求、即ち求道心の直感として、我々は世間語と簡んで教えを求め、教えを聞こうとするのである。そのことは、『観無量寿経』が、韋提希の致請についていみじくも教説する通りである。

一体、教えというものは、通常、経典とか聖典、乃至は著作などの形であるのが普通であろうが、それが単なる宗教的文献であることを脱して、我々の魂の深い要求に答える教えとしての性格、即ち覚者の言説という、教法の本来的性格を露わにして来るのは、まさにそのような状況においてである。そして、この状況の中で、魂の至盛の要求に動かされて、教えを聞こうとする心については、『大無量寿経』は美しい言葉で、次のように教説しているのである。

「阿難、諦に聴け、今汝がために説かん。対えて曰さく、唯然り。願楽して聞かんと欲す。」

「願楽欲聞」という、この意味深い言葉がよく表わしているように、教えに対して我々は或る意味で能動的な形で関わるのであるが、しかし、そのことを通して教えに触れたという出来事を、正確にいい表わすならば、そ

れは、教えが聞こえたという外はない事実である。教えが聞かれたとは、より的確には教法との値遇として了解されるべき事柄である。その限り、我々は、教えを聞くことがなければ、人生の意味が無に帰するような状況の中で、教えを求め聞こうとするのであるけれども、それにも拘わらず、まさしく教えを聞き、うなずくことができるのは、「遇ゝ」の縁をまつ外はないのであって、そこに聞法とか、遇法ということの厳粛さがあるのであろう。

その遇々の縁によって、我々が教えに値遇することができた時、そこに痛切に感ぜられるものが、深い必然の力である。即ち、遇うべくして遇うたという感銘である。教えとの値遇は、意識の分別からすれば、「はからずも」という外はない。けれども、値遇の事実に立つならば、分別を超えて必然である。そこには、宗祖の

「遇ゝ行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」

との表白が語るように、遠い値遇の背景があるに違いない。値遇の出来事は、時熟において現成するのであろうが、「遇い難くして今遇うことを得たり」という、その今の時を熟せしめたものは、それまでの求道の模索と錯誤の全ての道程である。その道程の全てが、この時、教えとの値遇のための、かけがえのない宿縁として、改めて見直されて来るのである。既にして宗祖は、

「然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて、本願に帰す。」

と、自分の遇法の事実を表白しているのであるが、この建仁元年という年に出来事となった宗祖の入信については、その遠い背景としては比叡山二十年の苦闘が、その近い縁としては六角堂百日の参籠が、無始以来の流転という深淵を垣間見せつつ、遇法の時が熟するための強縁としてあった訳であろう。そして、これら一切の宿縁を通して、教えとの値遇を必然ならしめた根本の力を、宗祖は本願力としてうなずいたのではなかったろうか。

このようにして、我々の人生において決定的な意味をもった教法との値遇は、出来事となるのであるが、この値遇が我々に新たに開くものは、まさに起こり得べからざることが、今や実際に起こったのだという、深い感銘である。既に『大無量寿経』自身が、「無量億劫、難値難見」と教説するのであるが、善導ははっきりと「真宗叵遇、浄土之要難逢」と表白し、更に宗祖に至ってはこれを承けて、

「爰に愚禿釈親鸞、慶ばしき哉や、西蕃・月氏の聖典、

東夏・日域の師釈に、遇い難くして今遇うことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり。」

と、値遇の感銘を余すところなく表明している。この点からいうならば、浄土真宗を一貫して流れる根本感情は値遇の感動であり、真宗即遇という感銘であると、いうべきであろう。

このような挙身の感動を以てのみ語り得る遇法の事実を、宗祖の上に見るならば、それは先に挙げた、あの「建仁辛酉の暦、雑行を棄てて、本願に帰す」と記された出来事である。が、それは具体的には『恵信尼書簡』が、

「ごせのたすからんずる上人にあいまいらせんとたづねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて、又六かくだうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにもいかなるだい事にもまいりてありしに、ただごせの事はよき人にもあしきにも、おなじやうにしやうじいづべきみちをば、ただ一すぢにおぼせられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば、しやうにんのわたらせ給はんところには、人はいかにも申せ、たとひあくだうにわたらせ給べしと申とも、せせしやうじやうにもまよひければこそありけめとまで思まいらするみなればと、……」

と伝えるように、法然との値遇に外ならなかったのである。その限り、教法との値遇とは、端的な事実としては、師、善知識との値遇という出来事なのである。このことは、『散善義』の文に蘇った法然が、「偏依善導一師」という、疑いようもなく明快な言葉を語っている点からも、充分に窺われる通りである。

殊に法然との値遇について、宗祖は『高僧和讃』に、

「真の知識にあふことは
かたきがなかになほかたし
流転輪廻のきわなきは
疑情のさはりにしくぞなき」

と、感銘深く讃詠している。勿論これは師に値遇したてまつることの甚難なることを、和讃せられたものであるが、そこには又、その難であることの所以が的示されているようである。もとより、覚者の言説、即ちその本質において、如来の後得智として理解さるべき無漏清浄なる教法に目覚めることは、有漏分別の意識にとっては、いわば自己自身を突破するにも譬えるべき事態であって、この点に難の根本的理由があるということができるであろう。ここには更に、その有漏分別の意識の深いところ

に属するような障りとして、疑情が指摘されているのである。この疑情については、既に先師によって、意識における仏智疑惑と、意識下における不了仏智とが教示されているのであるが、これらの重層する疑情によって、我々は教えの中にあって猶、自分の有漏分別の延長上に所謂宗教の世界を構想し、そこに無際の流転を現出して、真に善知識に遇い、教法に値遇することは容易ではないのである。その限り値遇は時機純熟という外はないのであり、宿縁熟して、たまたまの時に師の教えに出会うことのできた感激が、「真の知識にあふことは　かたきがなかになほかたし」と表白されているのである。

もとより師は法の縁であるが、宗祖は更に法然をよき人と仰ぐことのできた無限の感動の中に、師に対する個人崇拝の人執を突破して、師との値遇の深義を次のように讃詠するのである。

「如来の興世にあひがたく
諸仏の経道ききがたし
菩薩の勝法きくことも
無量劫にもまれらなり」

わがために法を説く師の上に、如来の興世という最も根源的な光景が感得されているのであり、この時、師は一人の人間であるままに、しかも諸仏の位にある人として、我を証誠護念し発遣することとなる。師教との値遇という、我々にとって決定的な出来事の秘義は、既に宗祖によってこのように了解されて来たのである。

師教に値遇し、それを聞信することのできた姿は、『歎異抄』第二条に見事に語られている。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。惣じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。」

そして第二条を結んで、「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし」といい切ってあるが、このように明快にいい切ることができるところに、師の言葉を通して浄土真宗の教えに値遇した姿が表われているのである。注意すべきは、師教に対する絶対随順を表わすこの表白は、第二条の後半が語るように、法然に対する個人崇拝を脱して、むしろよき人の仰せにおいて、浄土真宗の教えが露出していること、その教えに対する深い帰依

の念を表明しているのであろう。師教の背景には、浄土真宗の教え――その凝集的表現が「ただ念仏して、弥陀にたすけられまひらすべし」であろう――の遥かな流れが、脈々と流れているのであり、その源を、我々は根本経典である『大無量寿経』にまで溯ることができるのである。その教えの歴史に、我々は値遇という形で関わるのであって、この一事が、我々が浄土真宗の教え、それ故に『大無量寿経』を、真実の教として語ることのできる、不可欠の条件となるのである。

二

『教行信証』「教巻」に、宗祖は、

「夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経是れなり。」

と、明確に提言している。これは殆んど宣言にも等しいような響きをもった言葉であるが、釈尊一代の教えを表わす数多くの経典の中から、真実の教として『大無量寿経』を選び取ったのであり、更にこの真実の教によって、浄土真宗を開いたところに、宗祖の立教開宗という事業があったのである。しかもこの『大無量寿経』が真実の教であるということこそ、宗祖にあってはむしろ独断的断定を破ってうなずかれた、歴史的確信ともいうべきものであったのである。

このことを確認するために、私は再び『教行信証』「総序」の結文に注意したい。

「爰に愚禿釈の親鸞、慶ばしい哉、西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈に、遇い難くして今遇うことを得たり。聞き難くして已に聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳深きことを知んぬ。斯を以て、聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなりと。」

我々をして深い如来の恩徳に開眼せしめる唯一無二の縁である「真宗の教行証」を表明しているものは、宗祖が自ら遇い難く聞き難しと表白した「西蕃月氏の聖典、東夏日域の師釈」に外ならない。そして、この聖典、師釈は、言葉を換えれば、「大聖の真言、大祖の解釈」と語られた、釈尊の教説であり、その精神を伝承した「伝統の聖者」である七祖の解釈である。但し、宗祖にとって、「よき人」として、直接の師であったのは、いうまでもなく法然であり、「大聖の真言、大祖の解釈」とは、宗祖自らが値遇し随順することのできた「よき人の仰せ」とその淵源に外ならなかったのである。或いはこれは、師教との値遇が改めて見出さしめた、宗祖自身の信を証誠するものとしての、真実教とその伝承というべきであ

ろうか。その原点としての法然の教えを、宗祖は一言でもって、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と凝集的に領受した。法然はよく知られているように、如来の本願に依って、諸行を選捨して念仏一行を選び取った自己の宗教的自覚を、選択本願の念仏と表明したのであるが、その限り、宗祖が絶対随順した法然の教えは、如来の本願をその精神としていることは、いうまでもない。その意味で、師法然の教えとの値遇によって現成した廻心を、宗祖が、

「雑行を棄てて、本願に帰す。」

と表白したのは当然であり、又、法然の言葉において露出する浄土真宗の教えが、如来の本願を説くことを内容とすることが、はっきりとうなずかれていたに違いない。ここに真実教を見る宗祖の眼が、確かに開かれたのであるということができる。

師教との値遇において現成する廻心は、実に深い宗教経験であって、師の言葉を聞くことを通して、我々の魂は、その宗教的自覚の内面に、我々を根源から目覚ますところの、深い喚びかけの声を聞くのである。それが如来の本願といい当てられて来たのであるが、ここに浄土真宗における根本的な宗教体験があるといえる。そして、これを体験として告白せず、経典に帰って経典に即して語るならば、我々は必ずや『大無量寿経』の「願成就の文」を挙げなければならない。

「十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃嘆したまう。諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生れんと願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。」

十方恒沙の諸仏如来とは、その神話的表現を取り去って、具体的事実を抑えてみるならば、我々が値遇し、我々のために教えを説く師――その根源的意味が「如来の興世」――そこに諸仏という意味があるに違いない。宗祖が法然を始め、七祖のうち五祖にまでも、釈尊を呼ぶと同じ尊称である「本師」を冠しているのは、この意味を暗示しているようである。そういう諸仏の教えを生み出し、それを通して自己の信として表現するその根本を、如来の本願と了解するのである。

従って、このような眼が開かれた時、数多くの経典の中から、正しく如来の本願を説く経典である『大無量寿経』が、真実の教として選び取られて来るのは、寧ろ自然である。のみならず、この如来の本願を説く「大聖の

真言」は、それがかつて言説せられたものとして孤立的にあるのではなく、所謂「大祖の解釈」、即ちこの真言に帰依し、それによって信を確立した方々の領解、いわば我々にとって師教としてあるものを通して、常に新らしく展開しているのである。その展開の象徴としてあるものが、「伝灯の聖者」である七祖に外ならない。この聖者達の象徴する本願救済の歴史こそ、その本願を説く教法が、真実であることを証明するものである。その意味で、如来の本願を説く『大無量寿経』こそ真実の教であるという宗祖の確信は、決して単なる個人的臆見というものではなく、このような歴史に証誠された、いわば歴史的確信であるといわなければならないのである。宗祖が、

「忝なくも三国の祖師、おのおのこの一宗を興行す。所以に愚禿勧むるところ更に私なし。」

といい

「弘経の大士宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう。道俗時衆共に同心に、唯この高僧の説を信ずべしと。」

というところには、もはや繰り返す必要もないことであるが、『大無量寿経』が真実の教であることは、この弘経の大士宗師等の出世が、自らそれを証明しているのであり、自分はただ、この教えの歴史に帰するばかりであるという、謙虚にしてしかも不動の確信が表明されているというべきであろう。

如来の本願は、かつて大聖の教説として言説せられたのみならず、歴史の中に具体的に生きて歩んで来た。その歴史に受肉した教えに値遇し、教えのいのちに触れた確信が、単に過去に説かれたに止まらず、常に歴史の中に新たに展開しつつ今現在説法する真実の教として、『大無量寿経』を選び取らせることとなるのである。

三

この真実教である『大無量寿経』の大意を、宗祖は次のように領解した。

「夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経これなり。この経の大意は、弥陀誓を超発して、広く法蔵を開いて、凡小を哀んで選んで功徳の宝を施することを致す。釈迦世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲すなり。ここを以て、如来の本願を説いて経の宗致となす。即ち仏の名号を以て経の体とするなり。」

ここに挙げられている弥陀及び釈迦の二つの名は、二つの人格として考えるよりも、むしろ、弥陀或いは釈迦と

いう名で表わされる二つの世界として了解してみたい。それ故に、我々の宗教生活は二つの次元をもっている。即ち一つは釈尊の教説に始まる歴史的経験的世界であり、今一つは我々自身の内面に展開する宗教的自覚の世界である、ということである。繰り返していうならば、釈尊の教説は一つの歴史的事実、所謂地上の出来事であるが、弥陀の名のもとに語られている事柄は、その教説を聴聞して我々に開かれて来る宗教的自覚の内容、所謂「邂逅の開く世界」の出来事というべきである。いわば教えに値遇した心が改めて感得した、極めて内面的な自覚の世界の光景であり、それを『大無量寿経』の教説に依って、「弥陀誓いを超発して、広く法蔵を開いて、凡小を哀んで選んで功徳の宝を施すことを致す」と、宗祖は表明したのである。

この弥陀の誓いとは何か。我々はここで、善導の「二河譬」を想起すべきであろう。『大無量寿経』は四十八の内容を教説するのであるが、それに先立って、端的な事実としては、「二河譬」が物語っているように、本願とは声である。私を限りなく彼岸に招喚する内面の声である。世間の中に在り、流転の中に埋没する自分に、限りなく目覚めを促して止まない、根源からの喚びかけの声である。二河譬においては、それは譬喩的に西岸よりの声として、「汝一心に正念にして直ちに来れ、我よく汝を護らん。」と表わされているが、「玄義分」には極めて自覚的に、「四十八願を発して、一一の願に言わく」と、本願の根本が次のように聞き取られたのである。

「若し我れ仏を得んに、十方の衆生、我が名号を称して、我が国に生れんと願ぜん。下十念に至るまで、若し生れずば、正覚を取らじと。」

教えに値遇したとは、それ故に、人間の言葉によって言説された教えを無二の縁として、そこに開かれた宗教的自覚に響流する音声を、明了に聞くことに外ならないのである。

この本願を、宗祖は「弥陀誓いを超発して」と語った。これは『歎異抄』に、

「さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。」

と述懐されているのと同じ感動をこめた言葉であるが、この述懐も亦いみじくも示すように、本願とはただ「在る」というものではなく、「たすけんとおぼしめしたちける本願」として、私に深い感動をもって聞かれる声な

のである。この感動は、『歎異抄』の劈頭に、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつこころのおこるとき……」

と表明されている、教えとの値遇が開く感動と、あい応じているに違いない。「念仏申さんと思い立つ心」という、大きな感動と共なる決断が、教えに値遇した姿であるが、その感動の中で触れることのできた本願は、「それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願」としかいい表わしようのないものであり、そのような感動をこめて、宗祖は「大意釈」に、弥陀の名で表わされる世界の光景を記したのであろう。

その本願の見出した衆生が、「凡小」の名で呼ばれるものである。いうまでもなく本願は本来、平等に「十方衆生」を喚ぶものであるが、それを殊に「凡小」と領受したところに、宗祖の宗教的実存の自覚がある。如来の本願に喚び覚まされ、本願に深々とうなずいた者の自覚した自分とは、凡小である。この時、ひとは、

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」

と表白されるように、全世界を背後にして、如来の前に一人立つ独立者となるのである。ここに、浄土真宗における宗教的自覚の独自の面目があるに違いない。

この凡小とは、いい換えれば、「それほどの業をもちける身」であるが、このことを更に伊東慧明氏の教示によって、『歎異抄』に学んでみよう。

㈠　そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

㈡　煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、……。

㈢　しかるに、仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごとし。われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

㈣　弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

これらの言葉を以て表白されている「親鸞一人」の内実が、宗祖の領解した凡小の姿であり、これが如来の本願

を呼び起こして来なければならない、本願の機たる我々の現実相である。このことを、具体的な経験に即して語るならば、我々が本願として表現する如来の大悲心に触れることができたということは、そのままに、凡小即ち罪悪深重、煩悩熾盛の衆生といい、煩悩具足の凡夫といい、それほどの業をもちける身という外はない、自分のリアルな姿に、一点の曖昧さも止めず、明確にうなずくことと同じなのである。そして、弥陀の名で表わされる世界が、どこまでも宗教的自覚の世界である限り、『歎異抄』が語っている「親鸞一人」の内実は、人間の客観的規定というよりも、本願の機という、極めて自覚的な人間凝視の表明と了解すべきであると思う。

これに対して釈迦の名で表わされる世界は、既に述べたように、我々の内面に、宗教的な自覚の世界を開いて来る機縁としての教説であり、歴史的なこの世界での出来事である。具体的にはそれは「大聖の真言」とその等流としての「大祖の解釈」としてあるのであるが、それを根本の教説に帰して、今、釈迦の名のもとに語るのであり、その眼目は宗祖の領解に明らかなように、群萌の救いにあるといわなければならない。実はこの一点に、釈尊の大悲というものがあるのである。

凡小といい、群萌といい、その体は同じであって、共に重い人間業を背負って、世にある者の名である。但し凡小という言葉には、本願の機であるものを表わすにふさわしい自覚的な、そして群萌には、歴史の現実に生きる者を表わすにふさわしい視覚的な語感が、それぞれ託されているのである。その群萌を宗祖は更に七祖の伝承をうけて「苦悩の群萌」と示したのであるが、それは非常にリアルな人間観ではあるまいか。人間であることの運命のもとに、常に何ものかを模索しながらも、その求め願っているものが一体何であるのかが、しかも確認し得ず、重い世の限定の中に生きているもの、それが苦悩の群萌であるが、この群萌の救いの道を説くところに、釈尊の大悲があるということは、実は、この群萌の苦悩の中からの祈りが、如来としての釈尊をこの世に出興せしめることとなる根拠であるというてよいのであろう。その限り、釈尊の出世と教説とは、群萌の苦悩の祈りに応えたという深義があるのであって、そこに人類の教師、我らの教主としての釈尊の独自の使命があると領解することができるのである。

凡小、群萌その体同じであるとするならば、それ故に、凡小の救いの法を求めた如来の願心において選択せられ

たものこそ、名号である限り、釈迦はその出世の意義をかけて、如来の本願を説かなければならないのである。宗祖はこのことを、『正信偈』において次のように的確に表明した。

「如来世に興出したまう所以は、唯、弥陀本願海を説かんとなり。五濁悪時の群生海、応に如来如実の言を信ずべし。」

この一点に、釈尊の出世本懐があることは、今や自ら明らかであろう。それと共に、私は尚一つのことを確認しておかなければならない。それは釈尊をして世に出興せしめたものが、我々群萌の祈りであり、その釈尊の出世本懐は、如来の本願を教説する一点にありとするならば釈尊の教説を通して、この如来の本願を聞くところに、我々群萌の出世本懐は始めて満たされるのだ、ということである。既に触れたように、我々は一個の人間として、殆んど本能として自己の生きているいのちの意味を尋ね、自己そのものを求めて行く。しかしその本能の問いに対して全く無知無能であるところに、凡夫としての我々の面目があるのである。その我々が、教法との値遇を縁として、自己を限りなく内に招喚する願心の声に目覚めることができた時、始めて本能の問いを満足することができるのである。その意味で、教えとの値遇のところにあるものは、本願を説くことなくしては、如来としての大悲を全うすることのない教主と、本願を聞くことなくしては、自分の本能の問いを満足させることのない群萌と、共にその出世本懐をかけた者の対面という厳粛な光景であろう。

このような意味から、宗祖は、如来の本願を説く経典である『大無量寿経』が真実の教であることを証明するのに、諸訳の『大無量寿経』の、出世本懐を表わす経文のみを以てして、

「爾れば則ち、この顕真実教の明証なり。」

と断言するのであるが、恐らくこれ以上に的確な教証はない、というべきであろうか。

教法との値遇のみが、我々に新しい人生を開く。その教法との値遇によって開かれた心を、若し信と呼ぶならば、その信は自ら二つの意味をもつこととなる。即ち一つは、「大祖の解釈」を通して等流する「大聖の真言」、即ち釈尊を始め歴史に出現した無数の人々によって言説せられた、所謂地上の教えを真に聞くことを通して開かれた心であり、これを宗祖は深い如来大悲の恩徳を感じつつ、「真心」と呼んだのである。そしてこのことを唯

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。

一無二の縁として全く新しく発起する、如来願心の廻向表現する自覚を、「信楽」と呼んだのではないであろうか。直接に我々に与えられてあるものは、公開せられた地上の教えである。教団といわれるものも、この教えの伝承される最も具体的な場として理解することができるであろう。この地上の教えの歴史に発遣せられて始めて、自分を独立者として人生に立たしめる、本願に招喚せられる自己一人の、深い自覚に我々は目ざめるのである。そして、この宗教的自覚に促されて、地上の教えの歴史に参加することこそが、幸いにも真実教に値遇することのできたものの、自らなる志願であろうか。